

日本学士院賞 受賞者

齋藤

修



専攻学科目 比較経済史・歴史人口学

生年 昭和二十一年 四月
略歴 昭和四十三年 三月
同 四十五年 三月
同 四十五年 四月
同 五四年 四月
同 五七年一〇月

慶應義塾大学経済学部卒業

慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程修了

慶應義塾大学経済学部助手

慶應義塾大学経済学部助教授

一橋大学経済研究所助教授

一橋大学経済研究所教授

経済学博士

平成一二年 三月 一橋大学経済研究所長（平成一四年二月まで）

同 一二年 四月 一橋大学名誉教授

同 二二年一〇月 英国ケンブリッジ大学リーヴァーハイム客員教授（現在に至る）

経済学博士斎藤 修氏の『比較経済発展

論——歴史的アプローチ——』に対する

授賞審査要旨

本書（岩波書店、二〇〇八年三月）は、第一に、経済史学が経済学から離れる傾向に対し、アダム・スミスの分業論の立場に立ちかえり、産業革命以前と産業革命期、さらにはそれ以降の工業化への見通しに連続的な軌跡を描いたこと。第二に、世界各地における経済発展のコースは多様であり、決して先進工業国の歩んだ道を辿ったわけではないこと。以上の二つを念頭に置き、斎藤 修氏は、経済学との関係を密にするとともに、時間的経過と、多様性を抱えた空間的広がりを経済発展論において、統合的に把握しようとする野心に満ちた著作を刊行した。

今まで、経済史学においても、経済発展論においても、その基軸となっていたのは、マルサスの命題であり、収穫逓減の法則をいかに克服したのか、という問題関心が、研究上のいわば通奏低音となっていた。この考え方に立つかぎり、産業革命ないしは近代工業化は、英国であれ途上国であれ、なんらかの外的要因によって引き起

こされたという説明になりがちである。本書は、これに対しつぎのような枠組みを提供するのが特徴である。

すなわち、第一に、近年の研究によると、一八一―一九世紀の英国の経済発展は緩慢で、産業革命によって劇的に変わったわけではなく、また、産業革命以前にも、プロト工業化が進行し、緩慢ではあるが、経済発展が産業革命以前に始まっていたことが見いだされている。このような、近世と近代の経済発展の連続性を、斎藤氏は「スミスの成長」と呼んでいる。そして、この考え方は、進化論的発想を持つていた経済学者アルフレッド・マーシャルに受け継がれたとする。こういった見方に立って、近世から近代を通じた比較経済発展論の枠組みを提示しようとする。

その際、工業化の地域的多様性について、斎藤氏は、市場の成長ほどの文化にも見られる普遍性を持っているが、土地や労働といった要素市場の浸透は多様であり、極端な場合は、市場原理を伴わないか、浸透が困難な社会もあるとする。その違いにより経済史の在り方が大いに異なってくる、としている。

第二は「スミスの成長」であるが、その中にも、基幹となる産業が、中間材大量生産か多様な高品質生産かの違いがあり、産業革命は前者で有利に作用したとはいえ、後者においても専門特化を通じて発展があった。

第三は、経済発展の担い手の持つ能力（斎藤氏はスキルという表現を用いる）——具体的には、識字率・時間感覚・分業への対応能力等の総合——の多様性である。あるスキルは、資本集約的産業、とくに装置産業に適合し、あるスキルは労働集約的産業、たとえば職工に適合する。本書は、これら諸要因の組み合わせで、工業化の諸類型が産み出される、とみている。

一九九〇年代、経済史研究は大きく転換した。西洋中心の考え方に代わって、K. Pomeranz, *The Great Divergence* (2000) に代表される中国とヨーロッパの交錯、求め得る最大限の統計を使い、大胆な手法によってこの二〇〇〇年間の世界経済の展開を記したA. Maddison, *Contours of the World Economy, 1-2030 A.D.* (2007) 等の出版によって新しい段階に入った。その流れは、J. L. Van Zandenらによる *The Long Road to the Industrial Revolution 1000-1800: Global Economic History* (London, 2009) に結実した。こういった新しい経済史研究の動向に対し、斎藤氏は、単にそれを日本に紹介するのではなく、自らもその一員として二二世紀における経済史研究を国際的に先導し、国の内外から、若手研究者が著者のもとに集まり研究が進められている。日本の研究はよって立つ基盤ではあるが、アジア・欧米に関する文献を広く渉猟し、咀嚼し、ある場合には批判を加えながら自らの体系のなかに位置づけ、究極的には、経済学を取り込んだ

近代世界経済史の確立を目指している。

本書は、そのような試みを、前著『賃金と労働と生活水準——日本経済史における一八—二〇世紀』（岩波書店、一九九八年）に続き、既に日本の近世・近代を経済学的分析により連続的にとらえた成果や方法を、さらに国際的に拡大し、経済史と経済学の接近を図った。その観点で、日本についても江戸時代から明治期にかけての研究を行い、たとえば一九世紀前半の優れた資料である『防長風土注進案』の経済学的分析を通じ、「非農所得」を統計的に算出し、「土」・「農」・「工商」という身分階層別の所得を推計することも評価できる。斎藤氏はまた、優れた英語の能力によって、数多くの英文論文を発表し、国際学会の役員を務めてきた。現在、英国Cambridge大学の客員教授として一年間研究・講義を行っている。

このような新しい研究手法の開拓、それにふさわしい能力・知識の持ち主の著書として、本書は日本学士院賞を受賞するに値する。

主要著書目録

著書（単著）

- ① 『プロト工業化の時代——西欧と日本の比較史』日本評論社、一九八五年
- ② 『商家の世界・裏店の世界——江戸と大阪の比較都市史』リポポート、一九八七年
- ③ 『比較史の遠近法』NTT出版、一九九七年

- ④ 『賃金と労働と生活水準…日本経済史における一八―二〇世紀』岩波書店、一九九八年
 - ⑤ 『江戸と大阪…近代日本の都市起源』N T T出版、二〇〇二年
 - ⑥ 『比較経済発展論―歴史的アプローチ』岩波書店、二〇〇八年
- 編者（抜粋）**
- ① 『近代成長の胎動』（日本経済史二―新保 博と共編、岩波書店、一九八九年）
 - ② Population and economy: from hunger to modern economic growth (with T. Bengtsson, Oxford University Press, 2000)
 - ③ Asian population history (with T.-J. Liu et al, Oxford University Press, 2001)
 - ④ 『アジア長期経済統計』第一巻「台湾」（尾高煌之助他、東洋経済新報社、二〇〇八年）